
ファントム墜落から ハンパク（反戦のための万国博）へ

— 江藤俊一氏に聞く

番匠 健一

立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センターリサーチャー

大野 光明

滋賀県立大学人間文化学部准教授

立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センターリサーチャー

語り手：江藤俊一

聞き手：番匠健一、大野光明

本インタビューは福岡ベ平連¹⁾で長年活動していた江藤俊一氏へのインタビュー記録である。江藤氏は1950年1月生まれ、九州大学在学中から福岡ベ平連の運動に参加した。現在は河合塾数学講師を務めている。本インタビューは、立命館大学国際平和ミュージアムで2019年7月17日から8月24日に開催された第125回ミニ企画展示「ハンパク1969—反戦のための万国博—」の準備のために行われた。反戦のための万国博（以下、ハンパク）で注目を集めた出来事の一つが、1968年6月2日に九州大学箱崎地区構内に墜落した米軍機RF-4Cファントム偵察機（以下、ファントム）の残骸が持ち込まれ、展示されたことであった。江藤氏のライフストーリーを伺いながら、ハンパクでの展示がどのように準備されたのか、福岡におけるベトナム反戦運動の歴史とそれがどのように結びついていたのか、さらには、ハンパクの企画・運営を担った大阪を中心とするベ平連運動との関係性などについて語っていただいた。インタビューは2019年3月30日午後に福岡市天神のカフェで行われた。

関連年表

〈1965年〉

10月10日 九州大学工学部応用理学教室の数学者らを中心に、個人参加のベトナム反戦市民運動とし

て「十の日デモの会」が発足。戦争と日本政府の協力を抗議する「十の日デモ」を始める。

〈1967年〉

10月8日 第1次羽田闘争。京都大学生・山崎博昭が死去。

〈1968年〉

1月19日 米軍原子力空母エンタープライズ、佐世保に入港。佐世保闘争。

5月11日 福岡ベ平連が発足

6月2日 九大箱崎地区構内に米軍機ファントム墜落

8月1日 機体引き降ろしに反対する学生が墜落現場にバリケード構築。

9月15日 福岡ベ平連、『ベ平連通信福岡』創刊号を発行。1部30円。第2号（1968年9月30日発行）より『ベ平連通信ふくおか』。

〈1969年〉

1月5日 深夜にファントム機体が何者かに引き降ろされる。九大水野総長が辞意表明。

3月28日～4月5日 ベ平連による九州キャラバン。3月31日にはベ平連は初めての太田収容所へのデモ。

5月20日 九州大学文学部自治会、大学法案に反対して無期限スト。以降、他学部自治会も無期限ストと建物封鎖へ。

5月21日 教養部学生大会で大学立法粉碎の無期限ストライキを決議。

6月15日 「ベトナム反戦と反安保の6月行動」の

集会とデモ。東京では約5万人集まる。

7月19日 福岡ベ平連、「安保をつぶせ！市民集会」を九州大学記念講堂で開催。参加者約2000人。「二千名の集会というのは、現在、この福岡に於て予想される最大規模」（いしざきしょうてつ「七・一九集会とわたし」『ベ平連通信ふくおか』11号、1969年7月30日）。小田実、小中陽太郎、前田俊彦、反博協会・南大阪ベ平連、北摂ベ平連ほかのフォークグループなどの参加。

8月3日 大学の管理運営に関する臨時措置法が成立。8月7日公布。

8月7日～11日「反戦のための万国博」が大阪城公園で開催。ファントムの残骸が展示される。

10月14日 九州大学構内に機動隊約4400人導入。全学封鎖を解除し、ファントムは学外に持ち出される。

〈1973年〉

1月27日 パリ和平協定

〈1974年〉

2月4日 『ベ平連通信ふくおか』27号発行。この頃、福岡ベ平連の活動は終了していく。

1968年——九州大学入学とファントムの墜落

大野：江藤さんのお生まれは。

江藤：1950年1月生まれです。1968年4月に九州大学に入学しました。

大野：68年。すごい年ですね（笑）。

江藤：そうなんです。その年の6月2日にファントムが落ちまして。しかも私はちょうど九大のすぐ近くに住んでいました。通っていた小学校よりも九大の方が家から近かったです。落ちたときも、爆風というか、何の音か分からなかったです。凄い音を夜中に聞いて。何だろうなと思ってしばらくすると、サイレンが鳴って。ちょっとやそつとじゃない。何が起きているかなと思って外を見たら赤くなっていて、九大の方かなと思って、九大の方へ行ったわけです。夜10時半くらいで、そろそろ寝ようかなと思っていたくらいですけど。正門の所には、もう米軍のMPのような車両が止まっていて。どんどん大学の中に入っていったら、飛行機が落ちて燃え

ている状況でした。

番匠：お生まれはどちらなんですか。

江藤：朝倉市です。その頃は甘木市とっていました。まわりのいくつかの町村を合併して、今は朝倉とっています。でも、3才くらいから福岡に来て、転々としているんです。最初は薬院、そのあと吉塚、そして箱崎にきました。その後は名島、香椎とだんだん東に行って、今は香椎に住んでいます。

私の親は工員です。九大の北、現在の三号線の北側の大きな鉄工所で工員をやっていたんですね。だから甘木にいたところを、福岡市に「仕事」が決まって、通うのに近いところへ移っていった。

私が九大に入る直前頃から日本全国の学生運動が盛んになった。ベトナム反戦運動がいろんなところで起きていました。九大に入る直前だけれど、1968年1月19日に佐世保に米軍原子力空母エンタープライズが入港して、そこに九大の学生とかいろんな高校生とか——私は行っていませんでしたけれども——がたくさん行って。九大は全国から来る人達の基地になっていた。私も箱崎に住んでいたの、九大の学生さんたちがデモに行くのをすごいなあなんて思って見ていたんです。入試直前ですよ。

入学して、私自身は運動する気持ちはなかったけれど、社会問題には強い関心があった。入った途端にオリエンテーションありますよね。そこにいろんな学生組織の人たちがやってきて、あーだこうだ言うわけです。ビラも配るし、学校のなかだけでデモしたりする。面白いのもあるし、やっかいなのもあります。いわゆる党派間の対立もあって、なんでこの人たちは喧嘩しているんだというのがありました。共産党系の民青とその他の三派全学連がいて——新左翼ってよばれていましたね——、どっちが好きかがあるわけです。最初はそういうことをめぐって、友達と討論をよくやっていたんですよ。

それで突然、6月2日のファントム墜落ですからね。まだ大学に入って1月ちょっとでしょ。しかも、落ちた場所がたまたま工事中の電算機センターだったけれど、すぐ横がコバルト60貯蔵庫で。近くには理学部の本棟があり、あの頃は徹夜で実験をやっている人とかいっぱいいた。ちょっとずれたらとん

でもないことになってはいたはずですが。それで、とりあえずクラスで決めて、デモンストラцияをやっていたんです。

大野：学部はどちらだったんですか。

江藤：私は工学部の電気系でした。電気系学科。その電気系学科の友達とクラス討論なり、デモをやっていたわけです。その頃は、教養は六本松にあり、私はそこに通っていました。最初の一年半は六本松です。私はたまたま箱崎にあったキャンパス近くに住んでましたから、大学から一旦家に帰ってから箱崎に行く。すると、色んなグループがタテカン出したり、デモしたり、討論合戦したりしていた。機体を降ろせよといったレベルのことはもっと後で、その頃はどんな運動にしたらいいのかというような討論でした。まだ対立は目立たなかったんだけど、だんだん民青と三派系が対立してくる。でも、暴力はなかったんですよ。スピーカーでおまえたちはなんだかんだと言うと、それを横でいろんな人が聞いて、どっちが自分の考えに近いかなんてやりました。私は最初、六本松のクラスを中心に、デモに出て行くということをやっていた。

箱崎キャンパスの墜落現場の傍にいと、学生じゃないような人たちもいて、「十の日デモやります」というピラを配っていたんですね。何をしているのかなあと。ついていってみようかなと思ったのが、おそらく夏休みの終わり頃でしょうか。ぼちぼちと参加していったということですね。

九大で学生と大学の対立が激しくなったのは、1969年1月の東大の安田講堂の事件があった後。その頃から、教授会とのある意味の「平和共存」というか、お互いの領域はこのくらいまで認めて、というのがなくなっちゃったんだろうな。

大野：機体の引き降ろしが1969年の1月5日です。

江藤：正月にやって酷いなというのがあった。学生による無期限ストライキと封鎖はその後です。ちなみに、封鎖といってもですね、軽い封鎖と（笑）、本当にふつうの学生も入れないようにバリケードを固めてしまう封鎖の2つがあるんですよ。

大野：軽い封鎖（笑）。

江藤：軽い封鎖は割と早くからどこでもやっていた

と思うんですよ。軽い封鎖の間は学生は自由に入れるし、学生に同調しているような教員職員も入って行くわけです。

大野：69年5月20日に文学部自治会が無期限バリケードストをして、それ以降、他の学部自治会も続いたようです。

江藤：そうですね。それまでは講義なんかもあったんですよ。

大野：これは大学法案反対のストのようです。

江藤：それはそうですけど、ファントム墜落、それ自体がきっかけです。大学をどうしていくのかについての、大学当局の姿勢と学生が対立していった。どこの大学もストをやっていた。文部省が大学管理法案を作るまでは、文部省は大学の行政にあまり介入できず教授会が決めていた。それを教授会ではない他の評議会みたいなものを作って、そこで決めていくという案を作った。それに対しての猛反発が69年です。だけど、それは時代風潮としかいいようがないですね。68年1月のエンブラ²⁾、67年10・8（第1次羽田闘争）あたりから、続いてきている。

大野：ファントムの墜落は何を引き出したのでしょうか。

江藤：当時、ぼくらは「自己否定」という言い方でやっていたね。そして、「専門バカ」という言い方。わかります？ 自分たちは大学に、それも九大にエリートとして入っていったけれども、本当にそうなんだろうかとか、自分たちのやっていること、自分たちの立脚点みたいなものが何かおかしいなど。

もうひとつは公害です。水俣からはじまって、60年代後半、いろんな公害が明らかになりましたね。四日市、阿賀野川とか、イタイイタイ病とか。1955年からいわゆる高度成長がずっとあり、その繁栄のなかでやってきた。それはどこかを犠牲にしてやっているんじゃないかという思いですね。ベトナム戦争もです。日本が潤っていたのはベトナム特需によります。日本の米軍基地はベトナム戦争の後方基地ですよ。いったんベトナムやグアムにいた兵士を日本で休息させてる。

だから、自分たちがエリートと思わされてきたこ

と自身が、どこか間違っているんじゃないかと。

大野：なるほど。

江藤：クラス討論会ではいろいろやってたけど、そんなことをよく話していた。自分たちはどんな生き方をしたらいいのだろうとか。

大野：生き方。

江藤：うん。たとえばこういう問題が起こる、すると教員たちはまともに答えない。まっとうな考えを持ってば、社会問題に対してそれなりの意見を持って当然なのに。専門だけ一生懸命やって、中身は馬鹿じゃないかということで「専門バカ」だと。そういうことを問題にしていました。

大野：クラス討論会は自主的に始まるものなんですか。

江藤：教官に「今日クラス討論したいから時間をくれ」と言うんですね。私たちに同調的な先生は90分全部あげると。それは嫌だと言う人もいれば、半分だけと言う人もいる。別に朝から晩までやるわけじゃないから、2日に1回くらいはやっていた。50人クラスで、2クラス合同で100人くらいがいつも一緒に講義を受けていました。そのうちの十数人から20人くらいが関心がある。どこか開いている教室で話すとか、誰かの下宿で話すとかもしょっちゅうで。クラス全体での討論はもうちょっと頻度が低いかもしれません。3、4日に1回でしょうね。

「十の日デモ」と福岡ベ平連

大野：「十の日デモ」は65年から始まっていますが、実際に参加されてみて、どのような感じでしたか。

江藤：最初、デモには教養部の学生部隊の一つとして出ていたわけですね。飛行機が落ちたばかりの頃、教養部は1学年2000人くらい。2年分いると4000人くらい。そのうちデモに出ていたのが2000人くらいでした。

大野：そんなにですか。

江藤：ええ。でも、強制とかではないですが、「行こう、行こう」と。少なくとも1000人はいましたよ。そのなかにはいろんなタイプの人がいる。三派系全学連が嫌いという人や、民青が嫌いな人、いろんなことを言いながら安保反対は共通していた。教

養部は六本松にありましたから、教養部だけのデモはアメリカ領事館か天神まで行って解散というコースでした。全学デモがありますね。全学デモは、いったん教養部から、現在の市役所のところにあった広場に行って、箱崎からくる部隊と合流して(笑)、そこから領事館まで行くといったものです。

学生は激しいのが好きだから——でも、ヘルメットかぶっているのはまだ少なかったです——、そういう人たちはジグザグデモみたいなのを始めるんですね。前の方で。その時に、デモの一番後ろあたりになんかさえない人たちが、100人くらいいるんですよ。当時の僕らからすれば、おじさん、おばさんですよ。ただ旗を持って、何も言わない。おとなしくついてくる人たちがいるけど、ああいう人たちが「市民のデモ」というんだらうな、くらいでした。「十の日デモ」というのがあるんだったら、私も行こうかなと思いました。おとなしく、時々スローガンを言うだけなんだけど、こういうデモも悪くないなと。2、30人が定期的にやっている。最初は月に一回とか気が向いた時に行っていました。1968年の8月に初めて行ったんだらうと思う。その頃、おそらく、ベ平連ができてたんですね。

大野：1968年5月に福岡ベ平連が結成されています。

江藤：たまたま墜落の直前にできたんですね。最初、私はベ平連と「十の日デモ」の区別も知りませんでした。一応別なんです。それで、68年の秋頃だと思んですけど、なんとなく常連になりました。顔も覚えられるし、デモが終わって、「今日は倉研でミーティングします」となる。「倉研」ってわかりますか。

大野：倉田先生の。

江藤：倉田研究室。倉田令二郎³⁾先生の研究室は、九大の最も古い建物で工学部本館2階にありました。東大でいえば安田講堂のような、大学の典型的な古い建物です。「十の日デモ」のあとに、ベ平連のミーティングをするから興味がある人は来てくださいと。

それでミーティングに行っ。それに「作業」です。それ。「作業」というのは、夜にステッカーとかを

貼ってまわるんですね。そういう活動の集結場所に倉研が使われていました。倉田先生は学生運動や市民運動が使いたければ自由に使ってくれ、と。先生は講義の時だけきてタバコを吸って帰るだけで、あんまりおられないので、学生が鍵を預かっていた。その教室には、「十の日デモ」を始められた山田俊雄⁴⁾先生や、平井孝治⁵⁾さんも講師や助手でおられました。平井さんは、エンブラ闘争の時に学生部隊と機動隊が衝突寸前までになって対峙しているときに割って入って、双方を止めたということで一躍有名になったりしました。

九州大学工学部応用理学教室は物理系と数学系に分かれていました。物理と数学の先生が10人くらいおられて、我々の運動を作った方々です。一番の年長が金原誠⁶⁾先生、倉田令二郎先生、山田俊雄先生、平井孝治さん、そして助手の川畑茂徳⁷⁾さんが積極的に私たちのところに参加して。それ以外の先生も、積極的ではないけれど協力してくれて。2、3人反発する先生もいたみたいですけど。そして、事務の人。深見康子さんや緒方エミさんが、ベ平連とかに積極的に関与されていた。まあ、教室7割近くがそういった雰囲気でした。

だから、学生が出入りしても文句も言われなし、事務に行ってボールペンを借りてくる(笑)。「ポスター作るからマジックを貸してくれ」と言うと、はいはいはいと。そこで会議もするし、ビラ貼りのために集まったり。

大野：福岡ベ平連はどういう活動をしていたんですか。

江藤：最初はベトナム反戦運動をやるグループということで。ところが、ベトナム反戦に限らず、どんどんやること出てくるんですね。そしたらいろいろやろうよとなって、その時期その時期に応じて活動をしていました。『ベ平連通信ふくおか』という機関紙を月に一回ぐらい出していました。

大野：特に印象に残っている活動はありますか。

江藤：それまで、デモは学生がやるものだというイメージでした。でも、ファントムが落ちてから、九大の先生たちが、最初だけデモの先頭に立ってやっていたり。そして、東京などでは「市民のデモ」が

大きく起こっているという話があった。福岡でも同じように市民がやっていた。ちょっとずつ関心を寄せてくれる人がいて。69年に入る頃から、市民運動のベ平連というのが福岡ではだんだん定着していったのだらうと思います。私自身がその時期から積極的にベ平連に関わっていくわけなんです。労働運動とか学生運動はあったけれど、これが市民運動だというのは、何もなかったわけですよ。東京なんかの運動の様子が少しずつ入ってくるから、自分たちもあんなのやろうよという話がでてきて。

番匠：福岡ベ平連のなかでは、どんな実務をされていたのですか。

江藤：まず、ビラを書かないといけない。『ベ平連通信ふくおか』の原稿を書いた。それが結構大きいんです。あとは集会で書いてもらった名簿の整理とか、集会案内の住所の宛名書きとか。宛名書きは多いですから、ミーティングで20人くらい集まったら、みんなでやるんですね。全部手書きの時代です。ビラの印刷は研究室の印刷機を借りれました。反戦フォーク歌集がすぐ売り切れるから、しょっちゅう増刷をしていたし。

番匠：紙はどうしてたんですか。けっこう使うと思うのですが。

江藤：研究室のものを最初はもらっていたんですが、そのうち、石崎昭哲⁸⁾さんが印刷所を始めて、紙をもらっていました。オフセット印刷だから、位置合わせとか、ある程度技術がいる。みんな上手になっていきましたね。もう一つ上の世代はガリ切りで。私たちも教養部時代まではガリ版でした。大学の小型印刷機を使えたので、我々はオフセットを使ってましたけど。一般のグループは、ガリが多かったんですね。党派のビラはガリ版で切ったやつでした。

大野：九大では民青系と三派全学連に分かれていたという話がありましたが、江藤さんがベ平連に自分の居場所を見つけ、関わり続けたのはどんな理由からなのでしょうか。

江藤：スタイルでしょうね。

大野：スタイル。

江藤：スタイルだと思います。党派は、かなり規律

とか組織とかがあって、うっとうしいなというのがありました。そういうのが嫌いだと、ベ平連とかに合いますよね。後半は暴力や内ゲバが嫌いだ、となるんですけど、最初のうちは機動隊と対峙することはあっても、内ゲバはなかったですからね。僕が[大学に]入ったころ、それはありませんでした。

西鉄福岡（天神）駅前でのフォーク集会

江藤：で、69年に入って、たとえばフォーク。反戦フォーク運動が関西から始まったのかな。東京にも移ったし。フォークをやっている人たちが福岡に来て、こんなのをやっているから一緒にやろうよと広めて回っていました。1969年春頃ですね。自分たちもそういうのをやりたいと始めたり⁹⁾。天神の西鉄福岡駅¹⁰⁾と元岩田屋デパートの間のコンコースでしょっちゅうやっていました。自分たちの歌を一時間くらいです。東京の新宿西口広場ほどではなかったけれど、けっこう人が来たんですよ。

それから、東京で6・15集会があったんです¹¹⁾。東京で10万人集まったらしい、こっちも負けられないよという話をして、福岡ベ平連主催の初めての大きな集会「安保をつぶせ！市民集会」をやったのが69年7月19日でした。このためにかなり一生懸命やりましたね。ほんとに手応えがあって、多くの方がきてくれました。毎日何かをやっていた印象があるんですけど。

番匠：フォーク集会の事をもう少し聞きたいのですが、関西から来たフォークの人たちとどうつながって、歌をつくっていったんでしょうか。

江藤：関西の人たちが楽譜を残していったんでしょうね。そのうち自分たちで歌集を作ったんです。100ページ近くで100円、200円で売って、活動資金にしました。ぼんぼん売れました。50曲以上が載ってました。岡林信康の「友よ」とか「山谷ブルース」を載せたり。今では著作権なんてありますけれど、当時は『新譜ジャーナル』とかから写してコードを適当につけてました。関西の人たちは自分たちで作曲してたくさん歌ってましたよ。

番匠：関西からフォークキャラバンみたいな形で来たんですか。

江藤：きましたね。それはでも、一回だけです。むしろ、個人的にやってきて、自分たちはこんな歌を歌ってる、という感じでした。「20世紀の谷間から」とか、いろんな歌がありました。

番匠：有名な人も来るんですか。

江藤：その頃は自分たちでフォークコンサートを企画することもありましたから、そこに高田渡が来たり、浅川マキの企画があったり。でも、レコードを出しているような有名な方は、フォークゲリラとしては来てないですね。

大野：南大阪ベ平連のフォークをやっている人たちが福岡に来たのが、福岡での活動のはじまりだったとも言われています。

江藤：かもしれない。東京の人が来たこともありました。逆にですね、ハンパクの時に仲間が大阪へ行って、梅田の地下で歌えと言われて（笑）。ゲリラ的に歌いだしたら、あつというまに100人以上に取り囲まれた。福岡ベ平連の平松君という方で、2、3年前に亡くなりましたけれど。自分たちが気に入った歌を適当にアレンジして、ボブ・ディランの歌を自分たちで訳して歌ったり。アメリカの反戦フォークのピーター・ポール&マリーとかを訳して歌って。自分で歌をつくって歌う人のことを「シンガー・ソングライター」と言うでしょう。

番匠：ええ。

江藤：誰かが、そうでなくて「シンガーソング・トランスレイター」だ、とかいって（笑）。

番匠：翻訳でつくった歌詞は面白いですよ。もとの曲に忠実なものもあれば、メロディだけとってきて、全く違うギャグや風刺をこめた歌詞をつける場合も多いです。

江藤：そうそう、ハンパクの時に、岡林信康が来て話をしたんですよ。僕と一緒にいった工学部の電気系の学生の友人が、「友よ」にケチをつけて（笑）。「夜明けは近い」ってのはちょっとおかしいんじゃないか、我々はちっとも近いとは思っていないと。「この闇の向こうには輝くあしたがある」とか、気安いことを言うのはおかしいとかって。

番匠：会場でやったんですか（笑）。

江藤：会場でやって。テントで、100人とか200

人が、岡林さんを囲んでいたんですが、その時に「ちょっと言いたいことがあるんだ」と（笑）。

ハンパク（反戦のための万国博）への準備

大野：ぜひハンパクの話聞かせてください。

江藤：ハンパクの話はですね、全体の事はほとんどわかってないんです。というのは、大阪のベ平連の人たちが企画して、全体像はあそこが知っているだけで。私たちはファントムを持って行った。ちょっとしたフォークの歌集やパネルをつくって、われわれがやっている市民運動の紹介をやった、くらいですね。その時に、さっき言った平松君が、梅田の地下街でちょっと歌ってみたり。最終日に大きな御堂筋デモがあったんで、それに参加してみたり。

番匠：江藤さんの視点から見たハンパクの姿を教えてください。

江藤：ハンパクの前にですね、私は平嶋康昌¹²⁾さんと大阪に行っているんです。平嶋さんは、私より3歳くらい年上で、その後、関西大学理工学部の先生になり、数年前に退官しています。69年の5月か6月に、大阪の中ノ島公会堂で、誰かのフォークコンサートがあったんです。それは大阪のベ平連が主催だったかもしれない。高石友也か岡林信康が出ていて。平嶋さんはギターも上手く、反戦フォークをやっていて、それに「行きたい、行きたい」といっていた。私はその頃にやっと、ベ平連の中のいろんな事務的なことにもコミットして、なんとなくわかるようになってきた。

当時は新幹線はないんですよ。急行「筑紫」に乗って12時間だったと思います。寝台も買えない。先に大阪のベ平連の人に会ったのか、先にフォーク集会に行ったのか覚えていないんですけど。中之島公会堂ってこんな古い建物なんだなと思ったのを覚えています。その前か次の日か、大阪のベ平連の事務局みたいなところに、二人して訪ねて行って、ハンパクのことをいろいろ頼まれた。対応してくれたのは、大阪のベ平連の事務局長だろうと思うんですけど、名前は忘れてしまいました。事務所にはあまり人がなくて、ハンパクのスケジュールなんか、べたべたと壁に貼ってありました。ハンパクのこと

は全く分かっていなかったんで、いろんなベ平連からの参加があるのかな、一応「国際」と謳っているから外国からの参加があるかなと思って壁を見ていた。印象に残っているのはマルクーゼからのメッセージがあったと書いてあったこと。ええと思って（笑）。

その時に事務局長の人から、「福岡からはぜひファントムの機体を持ってきてくれ」といわれたんですね。難しいなと思ったのは、物理的に持つのはどうってことないけれど、ややこしい法律に引っ掛かる可能性があるわけですね。国内法だけでなく、安保条約の関係の地位協定とかなんとかに。もともと石崎さんには電話で何か相談があったんだろうけれど。下手にそれで捕まると、変なところに持ち込まれるとまずいしな、という話を、石崎さんがされていたのを覚えています。[大阪での打ち合わせでは]平嶋さんが主に受け答えをしたんですけど、「うーん」といって（笑）。もちろん持ち込みたいけど、手段も難しいし、持ち込んだ後も終わって回収をどうするかを含めると、難しいなあと。でも、福岡では、とにかく持ち込む方向で検討しますねと。大阪の人からは「絶対お願いしますよ」と頼まれました。

大野：事務局の方は男性ですか。

江藤：私より年上の男性で、20代後半かな。かなりしっかりした人でした。顔は何となく覚えているんですけど。名前は忘れました。

番匠：江藤さんが行かれたのは、ハンパクの事務所ですか。それとも大阪のどこかのベ平連の事務所ですか。

江藤：それもわかっていないんですよ。平嶋さんがよく知っていて「ここに行け」といわれたところに私は付いて行っただけなんです。私は7月19日の「安保つぶせ！市民集会」に全力を注いでいたから、ハンパクについては何とかしましようというくらいでした。

大野：お会いになった事務局の方は木村満彦さんでしょうか。桃山学院大学の職員を辞めて、ハンパクの事務局の専従になられた方なんです。

江藤：ああ、その人かもしれません。

大阪城公園へのファントムの持ち込みと展示、その後

江藤：7・19がなんとか成功に終わった。ハンパクはいつだったか。

大野：8月7日から11日です。

江藤：すると7月30日かな、ハンパクの直近の「十の日デモ」の日です。当時、福岡ベ平連で20人くらいのデモをやっていたんです。その「デモの」後ろにスバル・サンバーとあって、今でいう軽自動車でしょう、ぼろっちいライトバンを運転し、スピーカーでシュプレヒコールを言いながら、デモにくっついて行く。いつもそうやっていたんです。そのスタイルだったわけです。そして、デモが終わった後には、旗やプラカードを荷台に突っ込んでいました。自分が立ち会ったかは覚えてないんだけど、たぶん7月30日と思うんですが、そのデモの前の日に夜中に、機体が置いてあった現場に行って。スバル・サンバーはいつも九大構内に止めてあったんですが、そこに「機体の一部を」運び込んだんです。上から毛布や旗、プラカードや何やら置いて。持ち出しの時に立ち会ったような気もするけど。石崎さんが言うには、「とにかくいつもの「デモの」とおりやれば臨検されないから、いつもどおりやろう」と。一番安全なのはスバル・サンバーが一番危険なものを積んでおくのがいいということで、普通にやった。いつもはデモが終わったら、旗とかプラカードを全部車に積んで、九大に持って帰って止めておく。ところが、そのまま大阪まで持って行ったというのが、その時のファントムの持ち出し方ですね。

[スバル・サンバーへの運び込みに] 立ち会っている可能性が一番あるのは、白川勉さん。彼はスバルサンバーの運転手です。69年10月の九大キャンパスへの機動隊導入のときに最後まで立てこもった一人です。その死守組の被告たちで『憤炎』という機関紙をつくっていたんですね。そこに彼が大阪まで運んだ顛末を書いています¹³⁾。

ハンパクには何十人で行きました。記録では福岡から6、70人行ったとなってるようですが、少なくとも3、40人は行ってますね。たとえば、ベ平連で活動していた大学のクラスメイトから10人く

らいは行っています。いつも活動はしていないけど、ベ平連のデモとか集会には来てくれる人が10人程度いた。私がお阪に行くのもその一人が乗って行く軽自動車に5人乗って、後ろ3人はきついけどしょうがないや、とか言いながら。ずっと大阪までそれに乗って行った記憶があります。いろんなところからどんどん行ったので、かなりの人数だと思います。

それで会場に行ったら、ちゃんとファントムがあったわけです。私は、それが大阪の事務局まで行って、会場に持ち込まれるまでは知らないわけですね。テントの前に置いて、「これがファントムだ」っていったら、珍しいからいろんな人が見に来た。見るだけでなく、機体をむしって帰るわけですね(笑)。「むしっていいか」って言うから、「ああ良いよ良いよ、どうぞ」って。

番匠：むしれるものなんですか。

江藤：ええ。もう燃えてますから、もろくなってるんですね。ジュラルミンでしょ。アルミだから。九大の周りの人は、むしれるもんだからもう勝手に持って帰っているわけなんです。当時は、これくらいの手のひらサイズでよければ、ゴロゴロといろんなところにありました。むしって帰れる。それは米軍にとっては大変なことだと思います(笑)。

週刊誌の記者からは、どうやって大阪に持ってきたのか教えてくれとか、やたらと聞かれた。そこはとぼけて、船便じゃないのとか、瀬戸内海を通ってとか答えて。本当のことは何も言わなかったんです。

問題は どうやって回収するかですよ。持ってきてくれと事務局長の人から言われて、ちょっと大変なんですよねという話もして。そしたら、「その方が面白いんじゃないか」と。安保条約で引っかかったら、それをもとに我々が裁判を引き受けると。安保条約が違憲かどうかはわからないけれど、裁判に持っていけるから、それがかえって良いから、うちが引き受けるのでぜひ持ってきてくれという話をしていました。

番匠：それは5月の段階のお話ですか。

江藤：そう。5月か6月かは覚えがないですけどね。そう言われて、そういう手があるなとは思いました。

我々の運動は、ずっと後ですけど、脱走米兵を援助したこともありまして。福岡でも出ているんですね。

大野：そうですね。

江藤：ええ。福岡には板付基地があって、そこから脱走する兵士がいる。東京で「イントレピッドの4人」なんてのがありましたけれど。福岡でも米軍に脱走を呼びかける反軍闘争をしていた時期があった。本当に板付基地から出たんですね。その時に、それで捕まるのは逆にいいんじゃないかなと。怖いけれど、安保条約それ自体を法の前ではっきりさせることができるので、かえっていいんじゃないかと言われていた。ハンパクの時にもそういう考え方があったんですね。できる限り捕まらないことは基本にして。

それでファントムの回収ですね。それをどうするかは決めないままでした。

大野：決めないままだったんですか。

江藤：決めないままです。で、[ハンパクの]最後の日には、絶対に警察に踏み込まれる。たとえば、私が友人と大阪城公園に行くと、機動隊から何度も職務質問を受けた。名前を言いたくないと言ったら、半分羽交い絞めにされて「連れて行くぞ」と脅されて。まあ、しょうがないから言ったら、離すんですけど。ハンパク会場の周りは警官だらけなんです。会場のなかには私服がいっぱいいるし。大阪のベ平連の人たちはそのトランシーバーの傍受をやっていたみたいで。私服の人たちがいまどんな話をしているのかを聞いてみたら、とにかくファントムを狙っているのは間違いないと。ファントムの行方をずっと着目している。それで、どうしましょうかねーだったんですよ、最後まで。

ハンパクが8月11日までなら、10日だったと思うんですけど、雨が降ったんです。結構ぱっと降って。テントの外にファントムを出していたんで、雨が降ったから中に片付けようと言って、いろんなものも展示していたから、全部中に引っ張り込んだんですね。そのときに「今！」って言って。ファントムの残骸を全部、毛布とかで包み込んで。そして、それをそのままどこかに、大阪の人たちが手配して、

バーッとどこかへ車で運んじゃったみたいですね。ルートは全然知りません。そしたらすぐに、私服が気づいて、ファントムの機体がどうもないかと言って、大騒ぎしていただかしいです。でも、ちゃんとうまいことエスケープした。うまいこといったなーって。本当は最終日にどうしようかと言っていたんだけど、雨が降ってテントの中に持ち込まないといけなくなったから、運び出した。

その後、戻って来的时候はどうか。[ファントムの残骸は]福岡に結局戻ります。倉研宛てに大きな木箱を送ってきたのかな。箱を送ってきて。大阪からだということで、ひょっとすると、と開けてみたら、機体が入っていた。これどうしよう。「これが大阪のハンパクに置かれていた機体です」と書いて、どこかに出そうかと、はじめは話していた。けれど、それもちょっとまずいかもしれないと。基本的には我々は何も知らないんだということにしよう。なんか知らんけど、機体があそこ[ハンパクの時にテントの前]にあったのも、福岡へ平連が知ってたことじゃない、大阪の人が勝手に置いたんだということにしよう。福岡は何にもタッチしていないことにすれば、それでいいかなあと。じゃあ、これどうしよう。九大に記念講堂という建物があるんですよ。あその前に置いときゃいいのよ、そしたら大学当局がなんとかするよと。で、ぽんと置いた。

そしたら、次の日の新聞に載っていましたね。機体は一応大学がちゃんと管理していることになっているんですよ。大学構内だから。その機体を勝手にあちこちに持って行ったり、移動させたりするのは、九大当局にとっては由々しき事態です。だから、機体がまた変なところにあったとあって、新聞に載った。

番匠：ハンパクにあったものがここにあったと報道されたんですか。

江藤：いえいえ。何かわからなくて、九大の管理が甘いんじゃないかという記事だった。新聞社は、これがハンパクにあったものとか、ベ平連が関与したとか、何もわからない。

大野：木箱の受け取り先は。

江藤：倉研だったと思う。倉研経由、福岡ベ平連くらいでしょうね。

大野：送られてきたのはハンパクの直後だったんですか。

江藤：少し時間があきましたね。一月はあいてないですが、ちょっと忘れたころですね。8月の終わりくらいじゃないかな。あまり構内に学生がいない頃でした。そう、それを置きに行ったんですよ、私もね。

番匠：そうなんですか。

江藤：ええ。持ち出したときも、スバルサンバーの中にあるのを知っていたのは、私と石崎さんと、白川さんと。あと2、3人だったんです。だから、ほとんどのベ平連の人はどうやって持ち出したか知らないと思います。返ってきたのも知らないと思います。たまたま私が倉研にいたときだと思います。どうしようと言ったら、石崎さんが「あそこに置いてきゃいいよ。どうにか大学が考えるよ」って。

大野：置きに行ったのは深夜ですか。

江藤：深夜じゃなくて、真昼間。学生があまりいない [夏休み期間中だった]。ははは (笑)。

大野：どんと置いて、放置して帰ってきた。

江藤：そうそうそう。

大野：墜落したファントムの機体は、建物の外側にあったんですか。

江藤：建物に引っかかっていたんですよ。それをひきずり降ろしただけですから、真下です。そこに学生がバリケードを作ってたんですね。

大野：面白いですね。米軍の機体を学生がバリケードで守ってる。

江藤：そうそう。

あの、この時代の雰囲気のひとつお伝えしたいのが、67年ごろまでは学生は学生服でした。女子大生も学生服じゃないけど、見ればすぐわかるような服装で。67年の10・8羽田闘争で亡くなった山崎博昭君の写真なんか、学生服ですよ。67、8年、私が入った頃までは、少なくとも九大では学生服が普通でした。学生はこういうもんだと、雰囲気として決まっていた。

ところが、それから1年もしないうちに、誰も

学生服をほとんど着ないし、ジーンズとか好きな格好をするようになったちゃって。みんな長髪ですね。私も長髪でした。男も肩まで伸ばしてましたね。68年から69年にかけて、服装とかがガラッと変わっちゃった。これはかなり大きかったんじゃないかなと思うんですよ。今から考えると。当時はそんなこと、何も思っていなかったけど。あの頃、風景がだいぶ変わっていったんですよ。

大野：なるほど。ものの考え方や着ているものが。

江藤：はい。

大野：少し話が戻ってしまうのですが、ハンパクの会場内で何か覚えてらっしゃることはありますか。

江藤：いやあ、さっきの岡林の話くらいで……。よそのベ平連とかをぐるぐるまわって、へ〜こんなことしてるんだと思ったのは覚えてますけど。どこが何をしていたかとかは覚えてないですね。うーん、小田実がいたような気がするんですけど。そういうくらいです¹⁴⁾。

番匠：会場には、フォーク集会をやっていたテントや、市民大学をやっていたテントなど、いくつか大きなテントがあったのですが。

江藤：あったかもしれない。それがよく覚えていないんですよ。

大野：[ハンパク会場に展示されたファントムの残骸の写真を見ながら] 確かにむしろそんな感じですね。

江藤：はい。こんなところ、どんどんむしっていくんですよ。

番匠：福岡に送り返されたときはだいぶ小さくなっていったんでしょうね (笑)。

江藤：かもしれない。

大野：どのくらいの本箱だったか覚えていますか。

江藤：このくらい。

大野：60センチ四方くらいですか。

江藤：むちゃくちゃ小さくなっていただけではありませんよ。

番匠：雑誌に載っていたハンパク入場時の写真を見ると、3人くらいで抱えていたものがあった。かなり大きいです。

大野：1m四方くらい。

江藤：だいぶ大きいですねえ。高さで1メートルより大きいくらいですかね。

番匠：持ち込まれたのは一つだけですか。

江藤：一つだけですね。いくつかに分けてというイメージは全然ないですね。

番匠：2018年のファントム墜落事故に関するシンポジウムで、当時の地域の商店街にはファントムの破片が並んでいた店も多かったとおっしゃっていたのが印象的だったのですが。

江藤：ありましたね。正門の近くのまとい寿司などには、少し大きめのがドンと置いてあって。よくありましたよ。

大野：その人たちはどういう気持ちで集めるんでしょうね。

江藤：いや、それは別に、まあ珍しいし。やっぱり取っておこうと思うんじゃないですか。罪の意識なんて全然ないですよ。落ちてくるもの拾ってくるだけですから。そりゃ、大事件ですからね。あの事件の記念になりますし。飛行機のかげらなんて、普通の人間はなかなかないですからね。うん、それも米軍のファントムともなればめったに手に入らないものだから。取っとうと思うのは、ふつうの感じじゃないですか。

大野：ハンパクの展示の時の参加者の反応はどうでしたか。

江藤：かなり珍しがって。「ああ、これか、これか」とか言って。「これちぎっていい」とか言うから、「ああ、どうぞどうぞ」と。私は落ちてすぐの現場にいましたから、すごい音しましたよとかいう話をして。墜落したすぐそばに放射性物質の施設があったので、あれは怖かったんですよ、という話もしました。

番匠：どれくらいの期間、大阪にいたんですか。

江藤：テント設営の現場とか覚えがないですからね、出来上がってから入ったと思います。福岡ベ平連で宿を一つ確保して、安宿ですけど、そこに泊めてもらった記憶があります。その宿代はベ平連の活動費から出すということになっていたらしいんですね。深見さんは、そういうとこまで活動費から出すのはおかしいんじゃないのと話をして。それはそうだな

あと、ちゃんとあとで回収した記憶があります。あと、1泊くらいは友人のお兄さんの家に泊まったような気がする。帰りも友人の車で帰りました。工学部の電気系の同じメンバーで帰った気がします。

大野：ハンパク直前、福岡での7・19集会に全力を出しておられた。お話を伺うと、ハンパクはそれに比べると、できる力で参加するようなものという感じですが。

江藤：そうですね。主催ではないですからね。失礼な言い方だけれど、お客さんの参加ですよ。私たちが参加させてもらいます、と出て行ったような感じです。

大野：一方でハンパクの目的には大阪万博への批判もあった。文明や科学を礼賛する国際イベント・万博に対して、それが公害や戦争につながっていると。

江藤：そうですね。繁栄みたいなのものの全面肯定はおかしいと。それは僕らがやっている基本ですね。

大野：そこと響き合っていた。

江藤：そうですね。だから、私自身も万博に行っていない。

大野：先ほどの宿代の話なんですけど、市民運動でのお金の問題ってとても大切だと思います。どこまで自分たちの会の予算から出すのか。たとえば、ハンパクへの交通費、ガソリン代はどうされたんですか。

江藤：僕らの車は、ガソリン代は[同乗した]4、5人で分担して。交通費は全部自腹だったと思います。

ただ、さすがにですね、東京になんか行ったり、岩国の「ほびと」¹⁵⁾に通ったり、常駐したりするのはお金がかかるようになる。そういうものは一部はカンパしようと、経費から出すこともありました。ただ全部面倒をみるなんて、そんなお金はないです。相手によるんですよ。自分でお金稼いでいる人は出さないけれど、学生でお金がない人だったら半分だすとかいうこともあったかもしれません。

たしか7・19集会は500円のカンパをとってたんじゃないかな。その当時からすれば[金額が]大きいです。300円くらいがふつうの集会のカンパで。誰が来たのかなあ、小田実とか、忘れちゃったけれど、彼等には旅費と宿泊費は払って。謝礼はなしで

すけど。さすがに手弁当で来てとは言えないから。その時は黒字になりました。反戦フォーク歌集とかの売り上げがかなり大きかった。そういうのを日常の活動費に充てる。でも、すぐに赤字になっちゃう。だから、「十の日デモ」が終わったら、「カンパ出せる人は出してください」と、カンパ箱をまわしていましたね。

アート・芸術と運動

江藤：[ハンパク会場の写真を見て] あ、こういうのいたな。

大野：アートの集団。

江藤：うんうん、アート集団、いました。その頃は、福岡でも落書きばかりしてまわる集団とか、いろいろいましたよ。芸術系の集団。彼らは組織的に何かするより、ゲリラ活動的だった。「TR 同」というね、落書きばかりしているグループがいて。誰がつけたのか、「天神落書き同盟の略じゃないかな」と勝手に言っていたんですが。それもほんとかどうか分からないけど。

大野：へ～。

江藤：いろんなグループが勝手にしかける。それがふつうでしたから。自分たちだけが運動をやっているという意識は全然ないですからね。69年あたりにはいろんなグループがやっていたので、わかんないくらいですよ。仲の良いのもあれば、全然知らないのもいて。

大野：天神の落書きってどんな内容のものだったんですか。

江藤：いや～、覚えてないですね（笑）。それこそ「TR 同」と書いてあるのが一番多かったんですよ。もうちょっと後かな、芸術系が目立ち始めたのは。

大野：ハンパクにはベ平連だけでなく、芸術系の人たちも集まっている。おもしろいですね。

江藤：そうそうそう。だから、デモをやると、こういう人たちが来て、ビラ配って帰るということはけっこうありました。どこでもあったんじゃないかな。

我々がベ平連と名乗ってするでしょ。すると、ある時期になるとベ平連に色がつくんですよ。こう

いう考えの持ち主たちだと。たとえば、小田実のなんかかんとかだ、とか。色がつくでしょ。そういうのが嫌いだとなると、別の何かを自分たちでつくる。それは思った人がやればいいという感じでしたから。

大野：ハンパクではフィルムの上映もされていたようです。

江藤：あったあった。でも何が上映されていたかは覚えてないですね。

大野：記録を読むと、小川プロの三里塚の作品とか。

江藤：ああ、そうか。福岡ベ平連の後期だな、だいたいあとになって、小川プロから人が来て。73年、4年ですね。

大野：福岡に来られたんですか。

江藤：ええ。映画のためにカンパしてくれと。カンパまではいいんだけど、貸してくれと言い出して。カンパだと数百円とかせいぜい千円だけど、何万円とかいう単位で貸してくれと言いだした。けど、返さないんですよ（笑）。だから、みんな、怒っていましたね。

脱走兵との出会い

大野：さきほど脱走兵の話がありましたけど、板付から出てきた兵士がいたのですか。

江藤：そうです、そうです。一人出たんですよ、本当にね。東京あたりでぼちぼち出てきていたわけですね。岩国でジェーン・フォンダを呼んでやったイベントがありましたよね¹⁶⁾。それくらいからですよ。岩国基地の米軍兵に対して、戦争やめようという運動を始めて。できるかぎり全国に広げようということで、福岡にも米軍基地があるから、ビラをまきにいったんですよ。毎週だったかは覚えていないんですが、けっこうな頻度でやっていた。

米軍兵士の出入りしているところで、米軍関係と見受けられる人にビラを渡していたのですが、本当に向こうからやってきて。それで倉田先生の家に来て行って、倉田先生は「俺は英語を喋れんから」と言っ。英語話せる人がいなかったんです。しゃべれないし、言っていることもわからないし。ひょっとするとスパイかもしれないという思いも

ちょっとあって。どうしようと。

それで、井上正治さんといって、私たちがいた頃の法学部長で、一時期、学長代理にもなった、法学者としてはかなり有名な人がいたんです。大学の当局として、立場では私たちの対極にあった人ですけど、我々の運動に直接コミットするわけではないけれど、言っていることはまあ、我々からもわかる人。彼だったらどうしたらいいかもわかるんじゃないか、英語もしゃべれるんじゃないかといって、彼の家まで連れて行ったんです。玄関には上げないでいろいろ話して。結局ね、福岡では面倒みきれないと。東京では、イントレピッドから4人を脱走させた後がものすごく大変だったようですね。我々はそういうことまではできないだろうとなったから、基地に帰ってもらったのではないかな。彼がその後どうなったかはわからないんですよ。申し訳ないけれど、どうしていいか全然わからなかったですね。

もう一つ米軍基地があったのが、雁の巣。志賀島の入り口ですね。そこに電波基地がありましたから、そこにも何度もビラまきをしました。米軍から出てきたけれど、何もしきらなかったのが残念でした。大野：その人の生活を丸ごと引き受けますし、出口を用意しなければいけない。大変なことですよ。江藤：うん、そう、大変。

福岡ベ平連のその後

番匠：ハンパクは69年、そのあと70年。その後、ベ平連も終わっていきます。ベトナム戦争反対からいろいろな地域の課題を発見していく過程があるのかなと思うのですが、70年以降の福岡ベ平連はどうだったのでしょうか。

江藤：ベ平連の実態としてはもう少しのあいだ、維持されていましたね。72、3年までは、岩国の「ほびっと」の運動とか。

大野：板付の返還が1972年。

江藤：ええ、まあ形式的にですね。あれは本当の返還ではないという運動もありました。あと、反戦フォークはずっとやっていました。72年にはまだやっているという記録が残っている。岩国の「ほびっと」の支援もずっとやっていた。

正直、連合赤軍事件（1972年）が大きかった。その時に、ベ平連全国懇談会が岩国であったんですね¹⁷⁾。みんな、「あれは僕らの運動とは違うタイプ、ちがうんだよ」と言うんですよ。だけど、この頃からちょっと嫌な雰囲気が出てきたんですね。嫌な雰囲気とは、あんなことはやっちゃまずい、絶対いけないということは分かっているんですけど、どこかで突っ走るとあれが起きかねないと。あんなことを自分たちがやるとはまったく思っていなかったけれど、運動にはそういうものがあるかなあと考えて。その頃から、ベ平連に限りませんが、いろんな運動が冷えていったし、党派は内ゲバに走ったでしょう。

72年くらいは、まだ定例デモをしていました。72年12月に浦和で全国懇談会があって、これは私も出ました。

73年1月にも、福岡で市民集会をやっていますね。そして、73年、石崎さんが「野たれ死には覚悟の上だ」と言った¹⁸⁾。我々の運動も終結かなあなんていう話や解散論議が出るのが73年です。「解散」とするのか、どうしようかと。石崎さんは「それは野垂れ死にだよ」と。我々は組織ではない。自分たちの自主的な意志で始まっているんだから、それぞれが一人一人自主的に終わっていくんだから、それは「野垂れ死に」としか言いようがないよと。たとえば、石崎さんが「私はやめます」と言ったからといって、みんながやめる必要はないわけですし。それがふつうだと。

そして、その後、福岡ベ平連としてやったことはですね、ベトナムのカトリックのティ神父と仏教徒のマンダラー尼——おそらくベトコンのシンパですが、北でも南でもない中立派ということで——、ベトナムからやってきた人が、いまベトナムがどうなっているかについて講演をしたんですね¹⁹⁾。ティ神父がカトリックだったので、福岡のカトリックの人たちと一緒にやりました。ベ平連とYWCAの共催でした。私はこの少し前から、教団系の人たちと靖国法案に反対する運動と一緒にやっていました。ベトナムに米を送る運動もやりました。それがベ平連的な関わりの活動の最後かなと思いま

す。

その後、私個人としては靖国関係の運動をやっていました。また、韓国の朴正熙政権が国内で弾圧をしていたんですが、特に在日で韓国に留学していた学生をスパイだとして拷問にかけたりしていた。政治犯弾圧に反対する運動に取り組みました。ベ平連時代には、大村収容所に反対する運動もやっていたんですよ。九州キャラバンの大村収容所撤去デモとがあった²⁰⁾。それくらいから大村収容所や入管問題には関わっていたんです。被爆者の孫振斗²¹⁾を支援する運動にも関わりました。伊藤ルイさんたちも支援をしていました。伊藤さんたちとその後親しくなっていきました。ベ平連が入管闘争に関わっていた流れの中で、このような運動につながっていった。ベ平連の後の話についてはたくさんありますので、それは長くなりますよ。

番匠：それはまた別の機会に伺いたいと思います。

以上

謝辞：本インタビューの実施とテープ起こし原稿の編集にあたって、市橋秀夫氏より『ベ平連通信ふくおか』などの貴重な資料を共有していただいた。いただいた資料がなければ、江藤氏の語りを十分理解することができなかつたと思う。この場を借りて御礼申し上げます。

【注】

- 1) 福岡ベ平連とそれに先行した始まった市民運動「十の日デモ」については、市橋秀夫「日本におけるベトナム反戦運動史の一研究——福岡・十の日デモの時代（1）-（3）」、『日本アジア研究』11-13号、2014-2016年を参照。
- 2) 米軍原子力空母エンタープライズの佐世保入港とそれへの反対闘争。
- 3) 1931年、香川県生まれ、2001年没。1950年に東京大学に入学し、新数学人集団が発足した際に副団長となる。東京大学大学院卒業後、大手前高校の教師を経て、1961年に日本大学文理学部講師になるも翌年辞職を強要される（日大数学科事件）。1964年に九州大学工学部助手。倉田令二郎著作選刊行会『万人の学問をめざして——倉田令二郎の人と思想』日本評論社（2006年）を参照。
- 4) 1937年、京都府生まれ。京都大学理学部、同大学院修士課

程を修了後、神戸商科大学助手を経て、1963年より九州大学応用理学部助手、1967年より助教授に就任。その後、立命館大学理工学部教授。

- 5) 1942年、京都府生まれ。九州工業大学、九州大学大学院を修了後、九州大学工学部助手に就任。原発反対運動に関わり、1980年代初頭に記録作家の松下竜一とともに「電源乱開発に反対する九電株主の会」を結成。その後、立命館大学経営学部教授。
- 6) 1909年、静岡県生まれ。京都帝国大学理学部卒業後、旅順工科大学予科教授、1944年に九州帝国大学助教授となる。
- 7) 1971年に九州大学工学部応用理学部助手、1985年に福岡工業大学工学部助教授、1997年より教授。
- 8) 1928年、山口県生まれ。福岡ベ平連の事務局長を務める。1970年に印刷所を始め、福岡ベ平連の事務局としても使用された。
- 9) 『ベ平連通信ふくおか』9号（1969年5月20日発行）によれば、1969年4月26日から「反戦フォーク・シットイン」が定期的に始まった。同年5月2日には北摂ベ平連、南大阪ベ平連からの参加もあった。場所は天神・岩田屋横。「これまでのデモやシュプレヒコールとちがって新しいコミュニケーションの手段を開発してきたように思われます」とあり、毎月10、20、30日午後4時に定例化しようと思う、と書かれている（同上、2～3頁）。
- 10) 現在の西鉄福岡（天神）駅は、1995年に旧駅舎からターミナルビル新駅へ移転されたものである。
- 11) 「ベトナム反戦、反安保、沖縄返還の要求を中心に、思想・信条等のいかにかわらず、多数の市民・文化団体・グループ・個人が連携をとりつつ、創意にあふれた独自の行動を展開する」という趣旨で、ベ平連を中心に、各大学全共闘、反戦青年委員会、政治諸党派が集まり「反戦反安保沖縄闘争勝利6・15実行委員会」が結成された（『ベ平連ニュース』44号、1969年5月1日、8頁）。同委員会は1969年5月19日から6月30日までを「ベトナム反戦と反安保の6月行動」とし、6月15日には東京で約5万人参加のデモを行った。全国各地でも同様のさまざまなデモや集会が行われている。
- 12) 1947年、福岡県二日市生まれ。1965年、九州大学理学部入学。その後、関西大学システム理工学部准教授。
- 13) 白川勉「F4ファントム25時間輸送奮闘記」『憤炎』10号、1978年。
- 14) 『ベ平連通信ふくおか』第12号（1969年9月10日発行）にはハンパクに行った参加者の手記が多数掲載されている。江藤俊一さんは「アナキズムについて思うこと」というタイトルの手記を寄せ、「ハンパクにいくと、いろいろな思想の持主が数多くいた。その中で僕の心を惹いたものはアナキストグループだった」と書かれている（同上、14頁）。
- 15) 1972年2月25日に米軍岩国基地近くに開店した反戦コーヒーハウス。京都ベ平連と福岡ベ平連が中心となり運営された。1976年1月18日閉店。
- 16) ベトナム反戦を訴える劇団FTAが1971年12月にアジアでツアーを実施した。日本国内では東京、横須賀、京都、岩国、三沢、そして日本「復帰」前の沖縄で行われた。
- 17) 1972年3月19・20日に反戦市民運動全国懇談会（ベ平連第

9回全国懇談会)が岩国市民会館で開催されている。その直前の2月25日、岩国には反戦コーヒーハウス「ほびっと」が開店。2月19日に始まった連合赤軍による浅間山荘へのたてこもりでは、3月7日にリンチ事件による最初の死体が発見された。

- 18) 石崎昭哲「野たれ死には覚悟の上だ」『ベ平連ニュース』92号、4～5頁、1973年5月1日。同号では、73年1月のパリ和平協定を受けて、「ベ平連9周年記念特集——協定成立と私たちの『いま』」が生まれ、石崎を含む全国のベ平連関係者23名の手記が掲載されている。石崎はここで協定に関して、「ベトナムの人びとの勝利ということは明らかだけれど、でもだからといってベ平連の勝利なんかでは全くない。よく考えて見ればベ平連運動に勝利とか敗北とかがあるということはそもそもおかしいので、大体ベ平連運動はいついつやめるとか、いつまでつづけるとかいうものでもなく、自分が関わりをやめるかやめないかということに語る以外にない。[...] 同様にベ平連がベ平連でありつづけなければならないという必要も全くなく今後ベ平連のわたしたち一人一人が問われるのはベトナムの人びとから何を学んだのかということだろう」と書いている。
- 19) 1973年5月8日に「5・8福岡集会——ティー神父とマン・ダ・ラニと私たち」が婦人会館で開催された。
- 20) 1969年3月28日から4月5日にかけて、九州各地をめぐる九州キャラバンが行われ、3月31日、ベ平連は初めての太田村収容所へのデモを実施した。キャラバンは各地域のベ平連の急増を受け、翌年の70年安保と反安保闘争に向けた地域ベ平連相互の協力によって企画された。『ベ平連ニュース』44号(1969年5月1日)および平井一臣『ベ平連とその時代』有志舎、2020年、129～133頁を参照。
- 21) 1927年大阪市生まれ。広島市で被爆し、韓国への強制退去後、1970年に治療目的で日本へ「密航」した。被爆者手帳交付申請の却下取り消し裁判を起し、1978年に最高裁で適用を認める判決を勝ち取る。在留許可を得て、福岡市内で暮らし、2014年に死去。